

栃の木からの手紙

2018年 3月号



流水のオホーツク。3月は、1月に続きひと月に二回満月の日があります。1年の内でもこの様な月が2回もある事自体珍しい。この冬の積雪の様子が例年とは違っている事。そして最近、畑の雪面に残る動物達の足跡の変化も気になる所。全体的に足跡が少なく、ウサギの足跡が特に少ないと思える事。立春を過ぎて春の陽射しを感じる事が多くなりましたが、旧暦から見るとこの1年はひと月半遅れています。だからと言って、農作業をひと月半遅らせる勇気はありませんが、気に掛けておく必要はあると思います。

流水が旅立つ季節が近づいています。

2日： 満月 旧 1月15日 旧小正月

6日： 啓蟄

17日： 新月 旧 2月 1日

21日： 春分

31日： 満月 旧 2月15日

31日： 美幌会 総会

マナビティセンター 9時から13時

総会 9時30分～10時30分

映画上映 10時45分～12時頃

3月 弥生						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31



今、地域創成の一つの方法としての農泊・地域ガイドツアーなどの講演会が各地で行われています。ということは、国自体が観光ニッポンを旗印に地域創成を進めている事の現れ。2月14日にはオホーツク地域でも、北海道農政事務所北見、オホーツク振興局、東京農業大学の共催で農泊シンポジウムが行われました。講師は、(株)北海道宝島旅行社の鈴木宏一郎氏。



私たちのありふれた日常は、外から来た人の目から見ると「非日常・異日常の世界」。そこに気付くと、こちらの在り様も変わってくる。この世界をどうやって伝えようか？どんな風に体験して楽しんでもらおうか？

3月31日(土曜日) 美幌会総会をマナビティセンターで行います。9時30分から総会を簡単に行った後、10時半過ぎには、一般の方達も含めて映画の上映会を行います。この4月1日から施行される法律「主要農作物種子法の廃止法」の危険性を中南米での出来事を通して考える映画です。協賛団体は「美幌町農民同盟」。



僕の農法は自然栽培というよりも自然農法に近い。

というのは、最初に農業を始めた時には、自然栽培というものを知らなかった。学んだのは自然農法の方である。当時は農法を詳しく説明する書籍はあまりなかった。だから、ただ農薬も肥料も使わなければいいのだろうという程度でしか考えてなかった。

まずは、耕さず、草を思いっきり生やして、その中で野菜を育ててみた。草は野菜の邪魔にならない程度に刈り倒しておいた。野菜が全然育たなかった。

芽が出たかすら分からない。芽が出たとしても、草の中で虫に食われて消えて行った。

どうにもならない一年目だったが、致し方なく畑を耕して、ビニールマルチを敷いて種を蒔いてみた。いわゆる自然栽培である。今度は不思議なくらい、野菜は育った。後で知ったのだけど、上手くできたのは、自然栽培に変えたからでは無かった。前に使用してた人が、大量に石灰と牛糞を入れていたからだ。いわゆる残肥である。草を刈り、畝を作る事で、その肥料が効き出しただけだった。

それが落とし穴だった。初年度は良く出来たが、翌年からどんどん出来なくなった。肥料貯金を使い果たし始めたからだ。いやむしろ畑は悲鳴をあげるぐらい、痩せ始めた。三年目には何も出来ない。出来ても虫に食われて消えていく。四年目はほぼ収穫がなくなった。何故だかその時は理由が分からず、ただ藻掻いた。自然農法も自然栽培も出来ないなら、農業を止めようと真剣に考えた。

五年目はイネ科の草と蔓性の草と地下茎の草だけの畑になった。草がボウボウになり、これでは無理だなと思い、無肥料の農業を諦めた。そして野菜の管理を完全に放棄した。数ヶ月放ったらかしの畑に、ある日戻ってみると野菜が鈴なりだった。僕が手入れをやめた瞬間から、野菜は出来始めた。これか、これが自然農法なのか。つまり、残肥が抜け、畑が元の自然の状態に戻ったのちに、「耕さず、肥料と農薬は使わず、草や虫を敵としない。」が生きてくる。

だが、話はここで終わらない。その後、東京に戻った僕は街路樹を見て首を傾げた。耕されている。肥料や農薬は使われていないが、草も虫もない。それなのに枯れ葉は落ち、枝は切り落とされてどこかに持ち去られても、街路樹は翌年にはまた枝を伸ばし、葉をつける。自然農法とて、真実ではないのではないのか。僕にはそう感じられた。自然栽培もダメ、自然農法もダメ。では、いったい何が真理なのか？

そこから学びが始まった。何故、街路樹は育つのか。何故、草の中では野菜は育たなかったのか、何故、耕した方が野菜が育っていたのか。それらの答えを探し始めた。畑は実験場と化していった。そこからは、収穫よりも、実験結果の方が重要になり、すっかり出荷を忘れてしまった。全く食えない日々が続いた。そんなある日、答えに出会い、僕の無肥料栽培が実現し始めた。